

戦後七十年公民館平和事業

一枚のはがき



平成二十七年八月

編集・戦後七十年公民館平和事業実行委員会
発行・日野市中央公民館



はじめに

日野市中央公民館では、平成三年度から、「8月に何があった」と題する平和事業を続けています。

戦後七十年を迎える今年、市民の皆様から戦時中・戦後の体験について、次の世代に語り継ぐことを目的として、「一枚のはがき」を募集したところ、多くの方から寄稿していただくことができました。

皆様にとっては、つらい思い出が多く、なかなか話していただけない内容も多くありますので、今回は、すべてのはがきについて、匿名としました。また、数名の方に集まっていたき座談会を行い、出席している皆さんから出たお話をまとめたもの（文末に「座」と書きました）、お話を聞きに行つて文章としたものもあります（文末に「聞」と書きました）。なお、はがきの文章は、ほぼ原文のままです。

お読みいただき、約七十年前に私たちの人生の先輩が経験したこと、思いなどを感じてください。

平成二十七年八月

戦後七十年公民館平和事業実行委員会

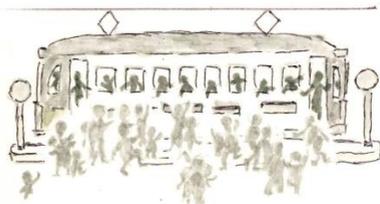
今から七十四年前（昭和十六年）の足跡

日支事変が長引き、戦時色が強くなっていた。退役軍人の召集、徴兵検査、徴用、国民の義務として歓迎した時代、物価の統制、供出、配給制と世の安定を計られていた。私は、昭和十六年三月、生地の尋常高等小学校を卒業、かねて希望していた写真屋にと親戚の経営する写真館に弟子入りし、二か月したとき、私に国から徴用令状が伝達、東京陸軍兵器給廠に出向せよとのこと、指定された日時に田奈部隊に出向くと千葉、静岡両県の一五歳から一八歳の若者二百五十名集合、隊長の訓示を受け、君たちの必要性を訴えられた。仕事は砲弾の組み立て、梱包、補給作業の連日。昭和十六年十二月八日、日本はアメリカに宣戦布告、第二次世界大戦となる。徴用期間が延期ということから愛国心のもと、帝国海軍に志願、一八歳で入隊した。昭和十九年一月であった。

学童集団疎開を見送りに

小学四年生以上は、都市部から近県へ疎開しました。万が一の都市空襲に備えて、学童を戦禍から守るためです。これからずっとお寺や旅館なので女の先生や寮母さんと一緒に集団の学校生活になります。学童疎開の出発の日です。近くの電車の駅までお母さんたちが見送りに来ています。何も知らない子どもたちは、始めは遠足のように喜んでいましたが、長い間家族と離れ、知らない生活をするので、夜になると元気がなくなり、皆悲しみました。実際にそのまま母子^{おやこ}永遠の別れになってしまった人もたくさんいました。六年生は卒業式があるので、なつかしい家に帰宅した数日後にB29飛行機の東京大空襲を受けて全滅した人もいました。帰京しなれば子どもは助かったかもしれません。でも家族が死んだら悲しいです。東京は焼け野原になり、広島や長崎に原爆が落ち、たくさんさんの犠牲者が出て戦争は終わりました。お国のために出征していった兵隊さんたちも、ほとんどの人がなつかしい家族のもとに帰ってくることはできませんでした。これが戦争です。絶対に繰り返したくないですね。

けつごうのしやーい
と がい
疎 開 電 車 さようならー
元 気 で ねー



戦中記

戦争末期（昭和十九年）のころの小学校（当時は国民学校）の卒業式で外国の曲だからということで「蛍の光」の代わりに「海行かば」を歌って卒業しました。

また入学した女学校では、普通に勉強することのできたのは一年間で、学校工場と化した校舎の中で必勝の鉢巻きをして、兵器の増産に励みました。

また、B 29 の空襲で焼土と化した学校そして我が家等の焼け跡整理に追われる日々も過ごしました。

学校の思い出

学校の校庭でやったこと。あのころ運動場と呼んだが、

「フセー」から始まり、「ススメー！」と言われ、その

繰り返し。

端まで行って「ツケー」だって。いったい何を突くんだろう、
と
思っていた。

(座)

軍隊での生活と入隊

昭和二十年三月十五日に溝ノ口駅から徒歩三十〜四十分の東部六二部隊に入隊した。所属の中隊の兵舎に皆と共に入り、軍隊生活について細かい説明を受け、自分の所属になる班に分かれて入った。

入隊の日に赤いごはんが配られた。これを見て、入隊のお祝いで赤飯か、と思って食べたらず非常に不味い。あとで、コメがないので朝鮮や中国で作ったモロコシの一種・コーリヤンを使ったものと知った。こんなことなので、他の食材も知れたものだった。

二、三日経つと、厳しい生活に変わってきた。就寝前の点呼・点検・総括があり、古い兵士から厳しい批判や文句があり、一列に並ばされてなぐられた。古い兵士が言うには、「新兵はなぐられて強くなる、これは鍛錬だ！」

昼は軍事訓練、夜は文句を言われてなぐられる、なにか間違いでもしようものなら二倍くらいなぐられた。

(聞)

友人が徴兵されて：

大学の法学部に入ったが、覚えているのは防空壕を掘ることばかり。上野公園や隅田公園、築地、日本橋、浅草などの道路わきの並木の間にも掘った。

学徒動員の、該当年齢が二十歳から十九歳に下がった。

東条首相が出席した壮行会が、神宮外苑の陸上競技場で行われたとき、徴兵された学生が銃をかついで競技場のグラウンドを行進していた。手をふって送った記憶がある。友人が猶予から外れて行進をしていた。

軍隊に入ったその友人から手紙が送られてきて、世田谷の部隊から外地へ行くことになった。二度と会えないかもしれないから会いに来てくれ、と言われ、面会に行った。

秩父の両神山に一緒に行こうか、といつも話していた。友人が召集されてから一人で登った。

半年以上経ち、友人の板橋の実家から手紙が来た。お母さんの文字。「九州から輸送船でフィリピンか台湾に行ったが、出て二日めに魚雷を受けて船が沈んだ。息子も船と一緒に沈んでいるが、船は引き上げられずそのまま海底にある。ついては葬儀を」という手紙。お宅を訪ねると、空っぽの骨壺が飾ってあった。

帰りがけ、すごい雨が降った。涙雨だな、中杉くん。

(聞)

軍国少年だった私（小学生時代）

一九二九年生まれの私は八十五歳。世界大恐慌の年で世界そして日本は戦争へと駆り立てられていった。小学一年で教育勅語も万世一系の天皇一二四代も覚えさせられ、今でも諳んじることが出来る。

徹底した軍国主義・皇室崇拜の教育で軍国少年に仕立て上げられた。

修身は軍神や勇敢な日本への話ばかり。「旅順開城」や「広瀬中佐」は歌まで歌わされた。修身の成績が悪いと他の教科がいくらよくても進学はできなかった。国語教科書の第三課は「ススメ」を習い、新しい字は上段に揭示され、命令形の「ススメ」で「ス」と「メ」を覚え、「へ」は「ヘイタイのへ」で習った。

教育勅語は、教育の真髄で、ご真影（天皇・皇后のお写真）の前で白手袋の校長が巻物を読み上げた。皆、最敬礼で拝聴し、皇居遥拝で終わった。

遊びは「兵隊ゴッコ」「水雷館長」「軍国将棋」。将棋は、王や金でなく大将や歩兵だった。米は配給、ついにはイモの茎まであさり、「ほしがりません 勝つまでは」と叫んだ。

南方 パラオで戦死した長兄

過日天皇がパラオのペリリウ島へ、のニュースに、私は胸がいつぱいになりました。実は私の大好きな長兄が戦死したところです。四年ほど前に娘の案内でパラオに行ってきた。いくつもの島がそのままか。ペリリウ島には昔のいたんだ日本軍の戦車が、そして山の中には水筒が三個ほど。父を母を呼んで死んだのか、さまざまなことが思われます。昭和十七年、両親と宇都宮三十六部隊の広場で最後の面会。かあちゃんを大事にしろよと私の耳に長兄の声が今も残っている。旅行のとき、持ってきたペリリウの土を両親の墓前に供えた。胸がいつぱいで。きっと長兄も。

書き尽くせない戦時中〜終戦後の体験

旧制女学校二年生（現在の中学校二年）で学徒動員で大阪の森下仁丹（軍隊へ薬の代わりに仁丹を納入）で手作業で、袋詰めをしていた。三年生で三重県へ疎開、三菱航空機へ寄宿舎生活しながら、部品づくり。勉強は土曜日のみで、国語の試験だけ。英語は廃止でカタカナ語はしゃべっても非国民扱い。たとえばマッチは火付け棒、テニスは庭球など…。四年生のとき終戦。学校は六・三・三制になり、女学校五年間のはずが私たちのときだけ四年で卒業可となり、大学へ進学予定だったが、大阪の家も工場も空襲で全焼していたので、あきらめざるを得なかった。

軍国少年だった私（中学生時代）

一年生から軍事教練の毎日、有名校だったので、配属将校が馬にのって生徒を閲兵し、訓練は若い伍長が担当し、過酷な訓練。何メートルも匍匐（ほふく）前進をさせたり、わら人形を銃剣で何度も突き刺し、三八銃という明治三八年製の銃は、一発撃つと薬莖を出して次の弾を撃つ旧式。焼夷弾に対しても、バケツリレーや荒縄を竹の先にくくりつけた「火はたき」。中学生になっても英語は敵国語というので禁止。英語は使ってはいけないうので野球の「アウト・セーフ」も「ダメ・ヨシ」と言わされた。

二年生からは学徒動員。工場で働く姿はニュースにもなったが、私はもっぱら外まわり。横穴式防空壕掘り、強制疎開の家の取り壊し、空襲後は焼けたビルの灰の片付け。泥だらけ、灰だらけ、ほこりだらけの日々であった。最後は中央郵便局。中四になっっていた。

八月一五日、敗戦の玉音は地下で整列して聞いた。「タエガタキヨ…」だけ聞こえた。聖戦必勝、神風、みんなウソ。屋上で号泣した。「二重橋で〇〇中將が切腹した」など聞こえた。なんと一二月末まで敗戦処理で働かされた。

戦争は、人を思考停止にする

昭和十九年の初め、小学校六年生だった。女学校入試の面接試験の練習のとき「大きくなたら何になりたいですか。」と聞かれた。「立派な荒鷲（あらわし。空軍兵士）の母になりたいです。」とわたし。「その答え、誰かに教わったの?」「いいえ、自分で考えました。」「そう。」先生はなぜか淋しそうだった。

戦後になって、先生の気持ちが変わった。あのころ、私にとってあの戦争は正義の戦いだった。だが本当は侵略戦争だったのだ。だんだん負けいくさになり、敵が本土上陸をしてきたら最後の一人になるまで戦うつもりだった。何のためにかも考えずに。自宅も学校も空襲で失い、将来のことなど何もなかったのに、いつか必ず勝つと思っていた。

戦争は人を思考停止にしてしまう。十二、三歳のころの自分を思うとそう考えざるを得ない。

食べるものがなくなっていしまいました…

「勝つまではほしがりません」のもとに子供は小国民になりました。

国家統制下で、先ず生活必需品は配給制度となり、一番大切なのは「米穀通帳」でした。食料、特に「米」は、遅配が多くなり、雑穀も農家にしかなく、サラリーマン家庭は難儀しました。

調味料は、第一に砂糖はなくなり、食用油もとぼしく、夜は燈火管制で暗く、国民は自然と声は小さくなっていきました。

愛宕山のNHKで朗読した

四角いガラスのブースの中でアナウンサーがニュースを放送している。——私がおとなに憧れた最初の情景だと思う。

一九四二年、一年生の終わりごろ、私は愛宕山（NHK）に連れて行かれ、朗読をした。

「校門を入ると二宮尊徳先生の銅像があります……」私は私の学校と違いますと抗議したが、先生は「いいのですよ」と。「毎年八日には先生と一緒に八幡様（戦の神）に行きます……」それらは、日本各地から集められた兵隊さんたちの誰でもが心に刻んだ郷土であったに違いない。翌日の校庭では、朝刊を手に校長先生はごきげんであった。我が家ではラジオの故障で、きかなかつたと言われていた。

ほどなく、「無線で聞いた」と戦地から軍事郵便が学校に届いた。校長室で私は幾度も返事を書いた。家に持ち帰らないと言われ、結びの言葉は「立派に敵と戦って、お国の為……」と教えられた。

戦後幾十年か経て、小野田少尉、横井さんがジャングルから帰国した。「恥ずかしながら……」と。言い知れない犠牲をはらって手にした「平和」を知る。

ぜいたくは敵だ

「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」と書かれたポスターを、町のあちこちで見かけました。男の人が戦地へ行った後の銃後（戦場ではない一般国民のいるところ）では、女子と子どもとお年寄りだけの生活。

どこのお店も閉まっているし、夜は灯火管制で電球の笠に黒い布をかぶせ、明かりがもれないように

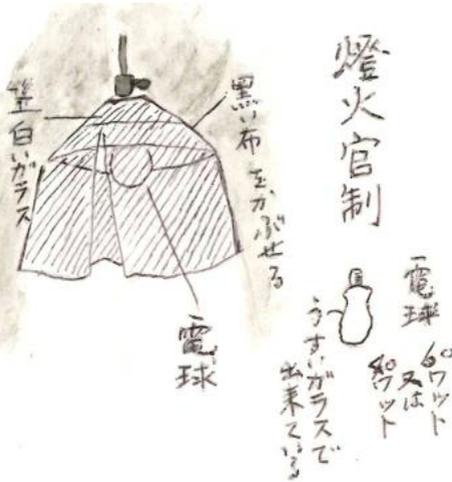
欲しがりません勝つまでは
ぜいたくは敵だ



するので、何とも淋しいものでした。テレビはもちろんだ無い、ラジオ

は天気予報はやらず、勝ち戦のニュースを、軍艦マーチが景気よく流れていました。食料の配給も

灯火管制



(続く)

とどこおりがちで生活できなくなっていました。田舎の親戚を頼って、一軒また一軒と引越し（疎開）て行くので、まるでゴーストタウンです。疎開用の列車の切符も買いに行けず困っていたら、隣組の若いお姉さんが朝早くから上野駅に何時間も並んで手に入れてくれました。もちろん証明書持参です。母親は幼児が何人もいて、家を空けられません。産めよ増やせよの時代で、子どもは多いほど良いとされていました。私たちは田舎へ疎開できませんでした。そのお姉さんもやがて引越すということでしたが、後に来る空襲にあわなかつたかと、今でも心配しています。

終戦になってからの生活はさらに大変でした。無数の焼け跡と、復員兵の帰国と闇物資の急激な出回り、インフレなど、まるで昭和の戦国時代でした。七十年たって、そういう場面にめぐり合った人たちの発言の機会もへるばかりです、「欲しがりませんよ戦争は！」のポスターを必要とするところでしょう。

戦争が長引いて……

沖繩が本格的に戦場になってきたころのこと。

都内青山に住んでいるとき、延焼防止を理由に、家がとびとびに取り壊されていた。

こんなことになってしまったのか、と、つくづくと思った。

学校の校庭は掘り返され、いも畑になった。

松の根っこを掘り返した。松根油という油をつくり、飛行機の燃料としたというが、

小学生がすることだから、たかが知れている。

学校に行っても、勉強をした記憶がない。空襲警報が出るたびに家に帰った。

なにしろ、ものがなくて、自転車屋さんに行ってチューブをもらってきかしたチューブを

消しゴムの代わりにした。

つらい思い出ばかり。

(座)

戦争は怖かった（当時六歳　東京新宿区在住）

小学生の姉二人は、学童疎開していて、父はお店を守るため家に残り、空襲警報が鳴ると防空頭巾をかぶり、母が妹を背負い弟の手を引いて、その後を私が泣きながら十分ほど先の横穴防空壕まで走って逃げました。

沢山のB29の編隊が富士山の方角からこちらへ不気味な爆音を立てながら攻めてきたことや夜に敵機を探すサーチライトの光の帯が空全体に動き、とても恐ろしかったことは忘れません。

戦争は絶対にしてはいけない。世界中から争いがなくなるよう祈ります。

静岡での大空襲

私はそのとき、小学校（国民学校）四年生。昭和十九年の六月十九日、静岡大空襲でした。五月十七日に亡くなった父の法事を翌日にひかえた夜中、警戒警報中にいきなり空いっばいの爆音とともに敵機の音がして、我が家の二軒先の家に焼夷弾が落とされ、B 29 による爆撃が始まったのです。

そのときのこととは、とても忘れることのできない大嵐と大地震が一挙に襲ってくるようでした。バリバリと家中がゆれ、窓ガラスが割れるものすごさ。身体は伏せていてもすごい揺れ方でした。下の姉とともに外に飛び出し、手を引かれて逃げることができました。すでにあっちこっちから逃げてくる人が行列でした。

逃げながら我が家のほうを見ると、もう真っ赤に火につつまれていて、私は泣き声で「家が焼けちゃうの」と叫んでいました。逃げ行く道でも、後に破裂する焼夷弾の破片や爆発のため発散する小石を背中に受けながら、夢中で走りました。

後に聞いた話では、静岡の大空襲も、B 29 が百機以上来たということでした。

勤労働員く召集く東京大空襲

大学の仲間と一緒に、名古屋の軍需工場に行った。常滑の旅館に泊まり、名古屋まで通っていた。戦車などに使われたと思うが、鉄線を作っていた。常滑にいたとき、家から「召集令状が来た」と連絡が封書で来た。早く帰ってくるように、ということだったので、担当教官に許可を得て名古屋駅へ。東京へ行く列車は終わってしまい、一晚駅で過ごし翌朝一番の列車で帰った。

埼玉・本庄の祖父母の家に行き、入隊の報告したあと一泊して帰宅したのが昭和二十年三月九日。翌三月十日に東京大空襲。B 29が、すぐ上の空を飛んでいた。江戸川区平井から見た下町の方は夕日を浴びたように真っ赤だった。家の庭に焼夷弾の不発弾がそのまま三発落ちていた。アメリカでもできそこないの爆弾を作っていたのか、と笑っていた。

赤羽の兵器廠に勤労働員で行っていた中学生の弟が帰ってこない。上野まで行けば赤羽に行けると思い、歩いた。道路の片面には一定の間隔で防空壕があり、その出口のところにも真っ黒になり木炭で作られた人形のようになった人が何人も倒れていた。道路に沿った川には水ぶくれになった人がブカブカと浮かんでいた。猛火に追われ、川に入った人がおぼれてしまった。地獄絵ってこんな感じだろうか。

夜遅く弟は帰ってきた。歩いてきた弟、「まわりは一面焼け野原だった。」

(聞)

空襲後の隅田川で見たこと

浅草に住んでいた康子さん、三月十日の空襲を逃げのび終戦。隅田川べりの今戸中学に入学、音楽室の裏から隅田川のコンクリート塀に出ることができ、そこに腰かけておしゃべりしたり歌ったり。

川面にドザエモンがよく上がり、生徒たちは「隅田川ときどき浮かぶドザエモン」と言っておしゃべりしていた。

男性のドザエモンはうつ伏せになっており、女性はおお向けに。引き上げると母の背中に赤ちゃんがいた。と聞いた瞬間の衝撃は忘れられない。悲しい歴史のひま。

軍国少年だった私（東京大空襲）

首都東京は、B 29 の猛攻にさらされた。私は山の手にいたので、三月一〇日の大空襲は東の空が真っ赤になるのを震えながら呆然と眺めていた。中四の私は、隣組防衛隊。「逃げてはならぬ」の命令。荒縄の火はたきを構え立っていると火の気もないのにシュロの木がボツと燃え出した。一〇メートルもある大通りの坂を、下から三〇センチもある火の玉がころがり上り、軒につくと家が火をふいた。

火の海にかこまれ「もうこれまで」と命令にそむいて命からがら逃げ出した。小さな墓地に逃げ込み、炎を避けて焼け死ぬのを免れた。

フェーン現象か、身体が二メートルもとびあがった。小さなコツパがひらひら飛んできたとと思ったら、目の前に落ちたときは一軒の家の屋根であった。

次の日、昼すぎまで煙で薄暗い中、先に逃げた母や妹たちとめぐり会うことができた。母が二月に生まれたばかりの妹を背負っていたが、「正子が息をしない」と叫んだ。チャンチャンコを脱がすと妹はスヤスヤと眠っていた。こわばった一同の顔がほぐれた。

東京大空襲で見た風景

私が国民学校二年生の終わりに近い三月十日、いつもは防空壕に入れと言う言葉でしたが、その日初めて逃げろ、でした。その声に母をはじめ家族皆で外へ飛び出しました。少し歩いたところで大きな飛来音が聞こえ、思わず振り返り空を見上げました。

空には何機もの飛行機がかたまつて飛来し、そしてパラパラと焼夷弾を落として去つたと同時に家々から火の手が上がり、火の粉がいったい降ってきました。

人々は急ぎ足で隅田川を目指して逃げました。家族は皆無事に隅田川に着きましたが橋の上には、髪はチリチリ、全身は炭のように真っ黒になった人々が大勢横たわっていました。私は恐かったのですが、疎開先へ行くため、恐いものなにもその人たちを跨いで駅へ向かいました。駅には超満員になっていた電車が止まっています。

窓から席をゆずってあげる、という声に母は私を窓から入れようと思いました。

(続く)

私は会えなくなると困ると思ひ、母にしがみついて離れませんでした。あとになつてみれば母にたいへん申し訳なく思ひました。私を抱いたままだから疎開先では、来る日も来る日も「おきなわ」といつて甘味は少なく、水っぽくて不味いさつまいもでした。ときどき父が焼き芋にしてくれたがでも不味い。それでも空腹は満たされませんでした。フスマ(注)も配給になつた様ですが、食べられませんでした。

白いご飯はいつになつたら食べられるようになるのか誰にも解らず、私は子供心に夢も希望も持てない日々を送つていました。何時のころからか記憶はないけれど、白いご飯がいたただけるようになりました。

母と一緒にサヤから取り出したグリーンピースで作られた豆ごはん、これは私の大好物となり、母の手料理でいっぱい嬉しい平和をかみしめました。

無駄な戦争の軍事費等を貧しい人々に分けられたら生まれてきたことを喜ぶ人々が増えるでしょうに、欲を捨て国同士も助け合えていけたら。

(注) 戦中・戦後の食糧難の時代に配給となつた家畜の餌となる製粉した小麦粉のカス。

第二波 東京大空襲（四月十三日）

昭和二十年四月十三日夜中の十一時ごろ、三月十日の東京大空襲に次ぐ第

二波。今度は主に東京西北部を狙い、B 29 三五二機による大規模無差別爆撃

（作戦任務報告書米軍文書による）によって板橋四丁目の小さいながら木造

平屋の我が家もまともに焼夷弾の直撃をくらい、あつという間に火の海。

バケツで水をかぶるのがやっと。家族はてんでんバラバラ。みんなで一緒

に逃げようなんて夢のまた夢！！ それがかえって幸いした。

第三波 東京大空襲（五月二十四日と二十五日）

板橋で穴倉生活二十日ばかり。空腹で栄養失調状態、漸く父が五反田の先の荏原中延の庭付きの一軒家をさがしてきた。家族全員で信州に疎開中の留守家とのこと。住み着き始めて十日ばかり、ホツとしたつかの間、とうとう第三派がやってきた。

私がやられたのは五月二十四日のほう。B 29 五二〇機の大編隊。東京南部がほとんどやられた。逃げようと思った直後、京浜第二国道は火の海だった。

翌二十五日はB 29 五〇〇機、連日の大空襲と空腹と疲労で恐ろしさも麻痺してしまった。そして長崎へ移動した。

中学三年生 十四歳

病床の母空襲避難の途中父の背中で死す

昭和二十年四月十六日は私にとって忘れられない。

サイパン島をアメリカに占領されてからB 29の日本本土の空襲が連日。昭和十九年十二月に東京銀座と有楽町駅白昼爆撃、大きな被害を被った。二十年三月十日真夜中、今までにない大編隊のB 29が襲いかかり東京の中心本所深川に焼夷弾の雨を降らせた。その猛火は二十万人以上の都民の命を奪った。この様な手段は軍官民誰もが予想だにしていなかった。そうして我が家の運命の二十年四月十六日の大空襲が襲いかかった。私の母はこの年正月から体調を崩し寝たきりになっていた。当夜半、空襲警報が鳴り終わるころすでに敵機は頭上に迫っていた。それが落としたであろう焼夷弾の巨大な火炎が迫っている。このままでは母もろとも家族全員が死ぬ。母を背負って逃げようと判断。しかし成年男子は身を挺して消火に当たらなければならない責任が有った。守らなかつたら非国民呼ばわりされる。それで私は避難する旨連絡に隣組長宅まで走った。

父の後に祖母、妹、私がそれぞれ布団をかぶって火を避けながら安全と思う方向へ。しかし母は途中から「苦しい苦しい」と息絶え絶えの呻き声。そして末娘、私の下の妹の名を呼び続けた。妹は小学三年。学童疎開で静岡県に居た。

やがて空襲も収まり東の空も明るくなってきた。焼けてしまったであろう我が家に向かい始めたとき母の頭がガツクリ右に。最後だった。

妹が母の死を知ったのは、終戦後疎開先から帰ったときだった。

八王子空襲

一九四五年（昭和二十年）八月二日、八王子空襲で家を全焼された私は国民学校五年生でした。

三日ばかり、ご近所でお世話になって、その後、愛知県の両親の実家を頼ることになり、岐阜県瑞浪（みずなみ）駅から山を越えて、愛知県へ移動する計画でした。

が、予定前の列車が「湯の花トンネル」の手前で銃撃されて乗車できず、浅川駅（現高尾駅）に引き込まれていた血だらけの列車を目にしたときのショックは今でも忘れられません。

次の日なんとか満員列車に乗り込んだ家族七人、夕方中央線瑞浪駅下車、飲まず食わずで山道を歩き続け、夜中の二時ごろ最寄りの親戚にたどりつき、おいしい白米のご飯をご馳走になったのがよい思い出です。

戦後の苦労はいろいろありましたが、子供五人とたいへんな事情の中で育ててくれた両親には感謝の念でいっぱいです。

八王子空襲

昭和二十年八月二日、八王子で空襲を体験した。とても恐ろしかったことを覚えてゐる。

八王子の駅前最初に爆弾が落ちた。台町あたりで機銃掃射を受けた。

戦闘機の操縦士と目が合うほど低いところからの射撃だった。隠れ場所がなく、逃げ回ったが隠れ場所が見つからない。あわててトウモロコシの枯れている畑に逃げ込んだ。親と一緒に逃げていたためか、不思議と怖さは感じなかった。

空襲後、水無瀬川に死体がゴロゴロところがっていた。見た感じは、桑の木が焼けたようなもの。いま考えると、非常にたいへんな、凄惨な体験をしたものだ。

(座)

八王子空襲と終戦

太陽の照りつける真夏になると、きまつて終戦前後のことを思い出す。

十三歳の女学生するとき、学徒動員令により学校工場でエンジンの部品作業をしていた。連日の機銃掃射に逃げ回りながら「お国のため お国のため」と頑張ってきた。明日八王子がやられる、デマが飛びかっていた。(実は米軍飛行機から宣伝ビラがまかれていたと後で知った)

昭和二十年八月二日未明、八王子の大空襲、上空には編隊を組みゆうゆうと飛ぶB29、電(ひょう)が降る如く落下する焼夷弾。真つ赤な焰に包まれた我が家。防火水の水はもうない。

もうだめだ。家族四人で富士森公園近くのとうもろこし畠に身をひそめた。市内は火災のるつぽに化し、トタン屋根が焰に吹き上げられ、ボタンボタンと空に舞い上がる。下町の方から避難の人々が集まってくる。炸裂音、得体の知れぬ轟音、ざわめきの声、恐ろしい夜が明けて、真つ赤な太陽が昇った。熱気にかすんだ無気味な太陽。どうしてか、ホツとしたのを覚えていた。

熱気をあげる我が家に近寄ると、水道管とガス管が焼けぼっくいがまだ燃えている火の中に立っていた。

学校の全焼、我が家、学校の後片付け、原爆投下

終戦。そのとき まだ二週間後に敗戦になるとは夢にも思わなかった。

現在は八十三歳になった。

そして世界の平和を望んでいる。

日野の空襲（日野本町・東町）

昭和二十年二月十七日、日曜日で学校は休みだったと思う。日野の上空へわんさかと艦載機（グラマン）が飛来した。現在の公民館の裏あたりにすごい音をたてて爆弾が落ちた。二五〇キロ爆弾、直径三〇センチ、長さ六〇センチくらい。幸いにして近くに竹やぶがあり校舎が破壊されることは免れたけれども、ガラスは全部割れてしまい、校舎が泥水だらけ。甲州街道も泥水が流れこんでいた。東町、今の立日橋のふもと、日野警察署付近、いまのエプソン裏、日野自動車の前などに爆弾が落ちた。夜間の爆撃には曳光弾（えいこうだん）という、落下傘がついていて下を照らすことのできる弾を落として爆弾が投下された。東町がいちばんやられていた。学校へ死体が運ばれていた。

昭和二十年に、日野の上空でB 29と日本の戦闘機が体当たりし、銀色に光っていた。機体がジグザグに墜落していくのを見た。多摩川の中央道橋梁付近だった。

三小のところに高射砲陣地があり、五門あった。東光寺のファーマーズセンター近くに探照灯陣地があり、夜間、敵機B 29が来ると照射し高射砲で撃つ。B 29の空襲に使用された爆弾は主にマグネシウム焼夷弾と二百五十キロ油脂焼夷弾だった。

戦争をこわい！とか、負けて悔しい！とかは思わない。戦争が終わって、ゆっくりと寝ることができ、バンザイ！ と思った。

（聞）

恐ろしかった機銃掃射

今でも思い出すと、背中がぞくぞくとして鳥肌がたちます。それは終戦間近な日でした。警戒警報が鳴り響き、間髪をいれずに敵機 B 29 戦闘機が轟音を鳴らし群れをなして飛んできました。丁度校庭の下のほうの松林にいて、屋根のない四角く掘っただけの壕に友達何人かと入り膝を抱えていました。と、その時、機銃掃射の激しいバラバラという音と松の木々がザワザワと音を立てて波打っているのがわかりました。いつ背中に弾が突き刺さるかと本当に怖く生きた心地がしませんでした。絶対に戦争は反対です。

江田島から原爆を見た

それは私が小学校二年生の夏休みのことでした。

私は瀬戸内海の小島、旧海軍の幾多のエリートを輩出した海軍兵学校のあった「江田島」に住んでいました。

その日はよく晴れて、真夏の太陽がきんさんと降りそそぐ気持ちの良い朝でした。私は伯母と、いとこと三人で広島市内の伯母の実家に遊びに行くので、うきうきと上機嫌でした。広島市に向かう港で、多分警戒警報でも出たためか、汽船はかなり遅れて江田島港を出航しました。

いとこと私は大はしやぎで船室を出て甲板を駆け回っていました。港を出て三十分くらい経った八時過ぎ、突然、周囲が百倍も明るく光ったような、空に一瞬鋭い閃光が走りました。私は船室でうたた寝をしていた伯母の所へ駆け寄り、「今、すごく光ったよ」と言うか言わないうちに、「ドーン」と今まで経験したこともないような大きな音が響きわたりました。

その時、広島市内では阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられていたなどは、まだ知る由もありませんでした。広島港に近づくとモクモクと黒い煙が上り町が火の海になってるのが見えました。桟橋の人が半狂乱になって、「市内の人以外は引き返してください」と叫んでいて、私達はそのまま江田島に引き返しました。島に帰ってから、きこの雲が、溶けかけたソフトクリームのような異様な形状になっていて、「なんだろうか」と島の人達が騒いでいたことを思い出します。あれから七十年、時は過ぎ去っても決して忘れられない、人類の永遠の絶望的な悲劇の思い出です。

友人の被爆

広島で被爆した友人から聞いた話です。

当時高校生だった彼は、登校途中、爆心地近くを走っていた電車の中にいたのです。

吊革につかまり、外の景色を眺めているとき、「ピカ」っと光が走り、その瞬間異常を感じ、目をつぶり、体を床に伏せたそうです。その動作が僕の命を救った、と彼は言っていました。

吊革につかまっていた人や座席にいた人は強い被爆を受け、ほとんどの人は二、三年のうちに亡くなったとのことです。

(聞)

長崎原爆

昭和二十年八月九日、長崎に原爆が投下された日です。一瞬の閃光と爆風、地響きに驚きました。私たちは、爆心地から離れていたので難を逃れました。

父は職場で被爆しぼろぼろになって家に戻ってきました。まのあたりに全身火傷をして水を求める人を見て「まるで地獄だ」と言いました。その後も父は身体がだるいと苦しそうでした。

八月十五日 漸く戦争が終わりました。小学校三年生の夏休み、八月九日より一週間、忘れられない日々でした。

学徒動員から終戦まで

戦争が激しくなり、昭和二十年四月から学徒動員。学徒動員は、自分の学校では二クラスで六〇人、その半分ぐらいの人たちだったと思う。当時十三歳。日野国民学校高等科一年のころだった。軍事物資を作っている豊田にある富士電機でジュラルミンの板やエナメル線を大和田の民間倉庫へ牛車で運ぶ荷役に行く。昭和二十年六月高等科の生徒で家が農業の者は食糧増産組（自家の手伝い）、その他の者は勤労働員組に分かれ日野町の工場（東洋兵器・神鋼電機・富士電機）の三班に分かれ六月十七日から八月十五日の終戦まで動員された。八月、広島・長崎に新型爆弾が投下されるとB29一機でも空襲警報になり、私たちは高幡不動の裏山へ避難する。下駄ばきだったので、走りにくいことこのうえなかった。戦争中は、裸電球に黒い布をかけていた。ただ、食べる者にはひもじい思いはしなかった。サツマイモ、ジャガイモ、麦があったので、腹が減った思い出はあまりないなあ。

八月十五日、天皇陛下からお言葉があるので正午に会社の総務前広場に集まるように言われた。ラジオから聞こえてくる言葉はよくわからなかったが、大人たちは泣いていた。戦争が終わった。とにかくうれしかった。もう明日から会社へ行かなくてよいのだから。

東洋兵器に防火用水がブルのような場所があり、うれしくて喜んで泳いで帰った。戦争が終わり、ゆっくり寝られると思った。

（聞）

軍隊で迎えた終戦、その後

昭和二十年八月十五日朝の点呼のとき、全員、庭に集合せよ、との命令が言い渡された。

部隊長から「これから天皇陛下の玉音の放送があるから、しっかり拝聴するように」との訓示があり、皆緊張して待った。そして日本の「敗戦」「戦争終結」を知った。

二日後、米兵がジープで乗りつけ、兵器弾薬をすべて今日中に集めておくように指示して帰った。翌日大型トラックで来た米兵は、集められた武器弾薬をトラックに積んで持ち去った。

召集兵は、一日もはやく復員するようにとの指示があり、どんどん帰っていった。私たち、残った現役兵は、目黒区の中学校に移動して、補助憲兵となり、米兵と一緒に周辺の治安維持にあたった。三か月ほどで治安が安定したということで、私たちの任務も終わり、復員が許可された。

(聞)

大きな犠牲によつて得た終戦

終戦の日、私は十四歳、女学校二年生でした。夏休みはなく、出征兵士の留守宅農家の手伝いが任務でした。昼ごろ天皇陛下の玉音放送がありました。内容がほとんどわかりませんでした。母親が「なぜもつと早く終戦にしてくれなかったのか」と叫んでいたのが強く印象に残っています。あまりにも大きな犠牲の果ての結果でした。

その年の暮れ、同じ年の従姉妹が朝鮮から引き揚げてきました。髪を丸坊主にして男の格好で、つらい行程が察せられました。彼女は農林一号というザクザクの甘くないサツマイモをおいしいおいしいと言って食べながら、いろいろ話をしました。その時の彼女の話は、英知に満ちていました。

命があればすべての物を奪われてもこんなに輝いている。「身についたもの、脳裏にあるものは誰にも奪われない」!!　これが彼女から学んだことでした。自分のこれからの一歩を踏み固めながら、明日への一歩を決めて進んで行こう……これが十四歳のその日から八十三歳の今日までの生きる流儀でした。これからはこの人生と大風呂敷をどう締めくくっていくか、体力の許される日まで好奇心を満足させながら暮らしていけたらいいな、と思っています。

苦しかった引き揚げ

朝鮮も戦争の色が濃くなり、危機感が強くなってきた。

満州の伯父から、こちらの方が安全だからと云われ、満州へ移った。

伯父は軍人で騎馬隊を仕切っていた。優雅な生活をしていたので私たちも平穏で楽しい生活をしていった。しかし敗戦翌日から生活は一変し、ロシア兵は荒れ狂い、女性は皆坊主頭に男性の洋服に変装しロシア兵に見つからないよう天井裏にかくれた生活をしていった。早く日本に帰りたいと願っていた。二十一年六月九日引揚命令がようやくやく出た。

懇意にしていた満州の人が、引揚げはたいへんだからお嬢さんは預かる。平和になり、自由に行き来ができるようになったら迎えに来なさいと親切に言ってくれたが、母はつれて帰ることになった。もし置いていかれたら残留孤児になっていたのである。奉天駅から無蓋車(注)で錦州まで行き、引揚船が来るまでの生活は一言では表されないほど大変でした。興安丸に乗せられ鉄板の上で寝起きはつらいの一言。私は船酔いで飲まず食わずに苦しみました。六月末、博多に上陸した。日本に着いたのだ。約一か月のつらく苦しい引揚体験です。

(注) 屋根のない貨車。雨に濡れてもよい貨物を運ぶ。

満州からの引き揚げ

家族六人で満州に住んでいた。昭和二十年八月八日、ソ連軍が入ってきた。

自動小銃を持ったソ連兵が「立て 出ろ」という仕草をして私たちは立ち上がった。「その子を助けてください」という母の声。私は助かった。こわかった。

引き揚げは、杵も屋根もない貨物列車で鉄条網が張られた収容所へ。そこで、食べられることの喜びを味わった。父がひとにぎりのコメを炊いて、重湯を作ってくれた。この重湯が私たちの命を救った。

昭和二十一年、博多へようやく帰ってこることができた。

(座)

戦後に餓死

終戦後もない八月のこと、南方特攻基地から帰る船の甲板に、東京に帰る者補充兵四名と少年同期兵三名の七名がひとかたまりになって、東京のどこに帰るのかなど話し合っていた。夕刻、腹がすいてきた。各自、乾パンを出して食べ始めた。補充兵四人が食べない。子供に持って帰りたいのだと。「それなら俺のを食べる」「いや、一食くらい抜いても年をとっているから大丈夫です」と水筒の水を飲んでいた。

夜中、船室はあまりにも蒸し暑く、明け方四時半ごろ甲板に出た。前方の手すりに寄りかかっていたそのとき、ドカンと大きな音とともに背後に水柱が。手すりにしがみついた。機雷にやられたのだ。船室に寝ていたものは全滅、甲板の後方にいた者は海に投げ出され、前方にいた者は甲板にたたきつけられた。

なんとか助かった者が波止場に整列した。「何してる。整列しろ」と怒鳴られた。東京へ帰ると言っていた補充兵がいないのだ。こんなことなら夕べの乾パンをやれば……腹を空かしていったのか。船のSOS、ボーボボは、一生忘れないだろう。乾パンも。

「着いた波止場はどこですか」「神戸、八月二十七日 私の誕生日だった」

「もう一度、誕生したのですね」

十五歳少年兵の話、八十五歳の今、初めて話したそうです。

戦後の混乱期

何しろ、食べるものに困ったことを覚えている。

青梅線、五日市線にのって、親と一緒に買い出しに行った。電車には座席がなく、混雑がひどく、窓から乗り降りをしていった。

なけなしの母の着物を持っていき、コメと交換してくるが、いわゆる「闇米」で、取り上げられてしまった。コメは牛にあげる、という言い訳をしていた。

また、食堂に行くときには、コメを持っていくことが必須だった。配給では、ホッケばかり。そのせいか、いまもホッケは嫌いで食べることができない。(座)

復員後、大学に戻って

復員から二か月後に大学に戻った。学生のうち、半分ぐらいしか来ていない。国外の戦地へ行った人は、まだ復員していない。半年ほど経ち、だいぶ戻ってきたので、友人たちの情報が集まり始めた。航空隊を志願した人もいて、なかには戦死した人、満州へ派遣されソ連に連れて行かれ、帰ってこない人も二人いた。

そのころの大学は復員兵が中心。教室には軍服を着た学生ばかりだった。見た目には、まるで軍隊の学校のような感じだった。

私たちは、お互いの軍隊での生活や戦場での話はしない。あるとき、他の人から強制された理不尽な生活体験は心の中に閉じ込め、表に出したくないからではないか、と思う。

(聞)

靖国の桜を憶う

戦争中、戦死した兵隊さんは靖国の桜となって返り咲くのだ、と聞いていた。兵隊さんの遺言に、「来年は九段の庭に散り敷かむ」がある。私は今年の写真展には靖国の池の面いっばいに散り敷いた桜を出すことにした。敷きつめた花びらたちのすきまに金色の鯉が尾びれを踊らせているのが映った。いまは金鷄勲章は金色の鯉になった。

靖国の境内には、東京の開花宣言を受け持つ桜がある。満開時には、たくさんの若者たち。見上げている桜たちが戦死した兵士たちだったなどと知らないと思う。自爆前に「靖国で会ふ嬉しきや今朝の空」と、「靖国の桜になる」と思いこむことで死ねたのかもしれない。戦死者の新しい桜がなくて七十年。この平和が続きますように。

一九四五年春。戦局も厳しくなつて、東京の学童は皆農村に預けられていた。その農家の庭で、私は機銃に狙われたのだ。「陽子！家へ入れ！」絶叫が聞こえたのと戦闘機特有のクイーンという急降下音が聞こえたのは同時だった。見上げると、向かってくる飛行機と笑つたような飛行士の顔がはつきり見え、瞬間、ババババ！と機関銃の音。私はからも農家の深い軒先に飛び込んでいた。戦闘機は来たとき同様鋭角に上昇していった。庭には鉛筆のキャップほどの弾丸と薬莢（やつきょう）が落ちていた。

二〇〇〇年代に入り、東京は平和そのもの。国道一六号を川越へと向かう車の中で年若い友人の「キレイ！」の歓声につられて見上げた空に立川基地を飛び立ったばかりの米軍機。私は総毛立ち、両腕はたちまち鳥肌におおわれた。運転中の車を道端に寄せ、忘れ去っていた恐怖が身体は記憶していて、いまよみがえつた不思議さを話した。助手席のアメリカ婦人が「ゴメンナサイ」と日本語で言った。「HISTORYね」と私は答えた。

「二枚のはがき」は、戦争・戦後体験をハガキ程度の大きさに書いていただきましたが、落川在住の朝倉康雅さんから、満州からの引揚時の体験を長文の文章でいただきました。全文を紹介します。

残 映

朝倉康雅（落川在住。 八十七歳）

月日は淀みなく流れ、終戦より七十年過ぎてしまった。苦労をともにした友も無く、自分なりに思い出して書いてみました。

満州新京報国農場でも、昭和二十年の四月、五月に次々と幹部男子は召集され、残されたのは若年男子と女子のみであった。八月九日夕刻、ソ連参戦を知るがどうすることもできず、野菜の収穫、出荷の最盛期であった。

八月十二日早朝、残された男子全員に召集令状が来た。十二日朝、出征していく彼らを見送り、その後、馬車二台に野菜を積み、友人の小林君と二人で新京へ向かった。新京、南嶺で軍隊に馬車一台を接收され、一台にて町の消費組合へ向かった。

その時兵隊さんの話で、ソ連軍がハイラル方面に進入しているので早く南方へ避難した方がよいと聞かされた。

しかしどうすることもできず、野菜を消費組合へ運んだ（組合の人は男一人しかいなかった。家族は南方へ避難していたのである）。

野菜を下ろし、「東三馬路」の場長（じょうちょう）宅へ。同所にて出征して行く場長始め幹部より「残った男子は女子、子供をまとめ、日本へ帰るように」と涙のうちに何度となく言われた。いま思うと、小林君二十歳、自分は十七歳であった。

農場員家族 計五十余名。どうして日本へ帰れるのか、金も言葉も通ぜず、何事も考えられなかった。出征して行く彼らと夕方別れた。夕日は赤く、別れを見送ってくれた。涙も出なかった。

日は暮れ、「伊通街道」を農場へ帰るのである。灯りも時計もなく、暗い夜道。

農場まで二十五キロ余り。二人は語ることもなく、前途のことは考えられなかった。途中、野宿していた。馬車にぶつかりどなられたりした。

暗闇の中、やっと浄月村駱農場会社につく。ともに灯りひとつなく暗闇であった。浄月村より農場まで五キロ余りである。

今考えるに、暗闇の道を農場まで帰ることができたのは、馬が道を知っていたので農場へ帰れたのである。十三、十四、十五日と南方へ避難準備にせわしく暮れた。十六日早朝より現地人の襲撃を受けた。

彼らは手に手に大鎌、槍を持って、襲ってきた。全員縛り上げられ、草原にあつめられた。どうすることもできず、彼らのなすがままであった。二、三年前の隊員に悪事をされ、反感を持っていた者が多数いたのである。“うらみ”をはらさんと思ひ集まったのであったが、古い隊員は召集され一人もいなかった。「コブシ」を

振り上げたが空をまっただ。この点がいちばん幸いしたのであったと思う。

満州の学生「王登」氏の必死の努力により、彼らに物品倉庫の鍵を渡し、彼らが倉庫の品物の奪い合いをしている一瞬に、馬車二台に婦女子、子供を乗せ、脱出した。

馬車の馬のいななきに、馬小屋より出た馬もいななきかわし、いつまでも馬車を追いかけてきた。

飼っていた犬は全部ついてきた。馬も犬も異変に気づき、目に涙していた。

十七日朝、新京市内に入れた。市内は無政府・無警察の状態であり、日本人への反感や怨みにより、殺された多数の日本人の遺体があり、死臭がただよっていた。その遺体を紅十字の人たちが台車で収容していた。

その後、場長、幹部職員と合流でき、新京市内で難民生活一年、当事者でなけれ

ば理解できない苦難の連続であった。

二十一年七月十九日夕方、引揚列車が南新京出発、無蓋車である。夕立のため、ずぶ濡れである。

「ガタン」列車は夕刻、南へ。だれも口をきく者はなかった。日本へ帰りたい一心で耐え忍んだ一年であった。

錦州の収容所を経て、引揚の港、コ口島へ。岸壁で嚴重な荷物検査。夕日を受け、日の丸の旗をかかげた船を見たとき、敗戦以来日の丸の旗を見たことはなかった。

八月一日夕方乗船。夕日を受け、船は港の土砂を巻き上げ出港、暮れ行く南満の山々、苦勞した大地、死せる友や不明の友を残して、頭の中は真っ白であった。

八日、佐世保へ伝馬船で接岸。われ先にと日本の土を踏みしめた。宿舎への道で土地の人の接待のお茶。「ごくろうさまでした」の声。終戦以来、はじめての日本

語のやさしい言葉にありがたくお礼の言葉も出なかった。

三名の遺骨とともに、八月十二日故郷へ帰り着くことができた。

戦後七十年過ぎ、語る友も亡くなり、一人で思い出すのみである。

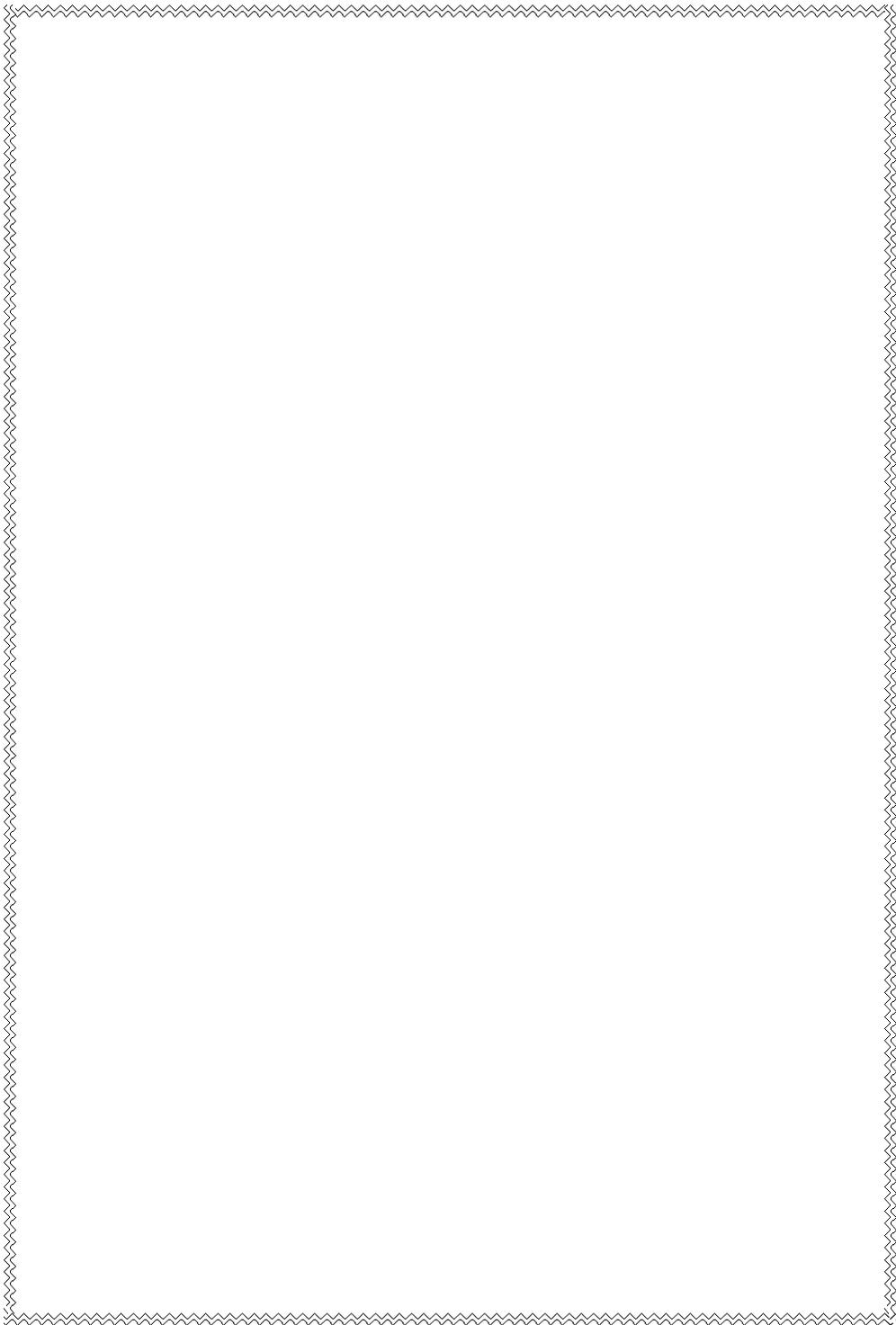
彼の地で過ごした年月はなんであつたのか。そのときの権力、教育の恐ろしさを感ずる。

現在、平々凡々に一日一日が短く感じ、健康で暮らすことができず人生最大の辛せであると感ずる今日である。

あの山の下で我れは

梨を作り六十年あまり過ぎおり

夏の暑くない日に、亡き先輩、友の墓を巡りたい。今、準備中です。



戦後七十年公民館平和事業

一枚のはがき

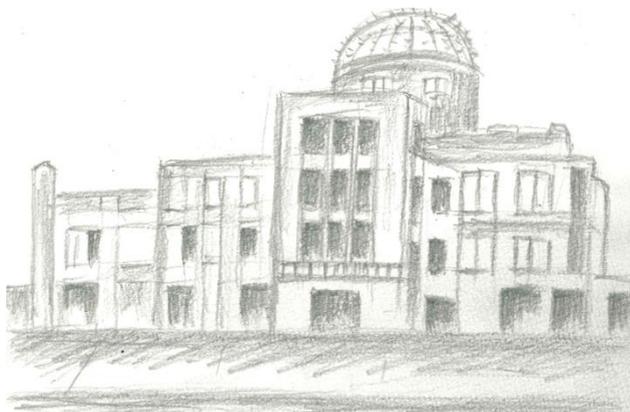
平成二十七年八月一日

編集 戦後七十年公民館平和事業実行委員会
発行 日野市中央公民館

日野市日野本町七の五の二三

TEL 042・581・7580

表紙題字 佐藤章夫（実行委員会メンバー）



広島原爆ドーム 絵 清水利一さん（平山在住）

